

おぼけのきせつ

陽羅義光（ひらよしみつ）

「おじいちゃん、おぼけって、いるの」
「おぼけは、いるよ」
「ほんとうに、いるの」
「ほんとうに、いるんだよ」
「どうして、わかるの」
「それは、おじいちゃんが」
「どうしたの、おじいちゃん」
「こどものころ、よくみたからさ」
「いいなあ、おじいちゃん」
「そうかい、そうでもないさ」
「おぼけの、はなし、してよ、おじいちゃん」
「いいよ、でも、こわいよ」
「おぼけなんか、こわくないや」
「おじいちゃんは、こわいな」
「よわむしだね、おじいちゃん」
「ばれちゃったか」
「じゃあ、おぼけ、きらいだね」
「こわくても、すきだな」
「どうして、すきな」
「おぼけだって、にんげんと、おんなじだからさ」

* * *

ぼくがこどものころ、とりわけ七歳から九歳のあいだ、昭和二十年代は、いまにしておもえば、他愛（たあい）のない、わらいぐさかもしれないけれども、きみようで、なつかしい時代、まさしく、お化けの季節でした。

母ひとり子ひとりで、母が仕事でいそがしいぼくは、ちよくちよく「かいじい」のところに遊びにいきました。

遊びに行くというより、お話をしに行く。

だいすきな怪談（かいだん）のお話を。

母にうそをつかなかくてもよかったのは、ぼくの興味（きょうみ）をしっていたし、みとめてもくれたし、きょうりよくもしてくれたからで、けれども、学校の先生はわかってくれないから、よくうそをついて、早退（そうたい）したり、やすんだりして、「かいじい」のところに、いったものです。

うそかまことか、ま冬は、「かいじい」は、冬眠（とうみん）をしているのだときいていたから、ま冬だけは、「かいじい」のところへは、いきませんでした。

それに、ぼくがすんでいた村は、ま冬の雪嵐（ゆきあらし）が、はんぱではなかったから、さすがに母も、「かいじい」のところにいくことを、ゆるしてはくれなかったのです。

「かいじい」のかっこうは、そのころよく読んだ、忍者（にんじゃ）マンガにでてくる、乞食（こじき）や浮浪者（ふろうしゃ）に、にていました。

顔は黒く、髪は長く、ひげづらで、歯が欠けている。

出身もわからず、年もわからないのだが、これがたんなる乞食や浮浪者ではなく、じつは卓越（たくえつ）したわざをもつ、忍者のかりの姿だという話。

「かいじい」は、そんな、ただ者ではない雰囲気（ふんいき）を、身につけていました。

もともと、こんなことは、いまだから、いえることかもしれないのですが。

「かいじい」は、街と村の、さかいめあたりの、戦争中は、防空壕（ぼうくうごう）としても利用された、祠（ほこら）にすみついていました。

土の洞で、入口だけは、頭蓋骨（ずがいこつ）ほどの、数個の石でかためてあります。

手前に、こどものぼくでももぐりにくい、もうしわけていどの、こぶりな鳥居（とりい）があつて、色ははげて、かたむいていました。

その祠が、どういう神様を祀（まつ）っているのか、ぼくにはわかりませんでした。

それに「かいじい」がどうして、こんなところで暮らしているのかも、わかりませんでした。

わからないことといえば、「かいじい」の「じい」は「爺」だろうけれども、「かい」がどういう漢字なのか、どういう意味なのか、だれにきいても、わからないのでした。

ずっとあとになって、いろんな「かい」の漢字を、いろいろあてはめてみたけれども、どうもしっくりきません。

怪、界、戒、塊、快、海、灰、芥、貝など。

たしかに、「かいじい」とは、いわゆる、怪談話ばかりしたものです。

それでも、「かいじい」は、ぼくにとって、あやしいおじいさん、ではありませんでした。

異界（いかい）にすむ、非人間でも、けっしてありませんでした。

村人は、聾啞爺（ろうあじい）だと、いっていましたが、そんなことはないでしょう。

ぼくといっしょだと、口が貝になったことは、ないのです。

怪も界も戒も塊も快も海も灰も芥も貝も、ちがう。

ただ懐だけは。

なつかしい、の「懐」。

そのとおり。

すくなくとも、いまのぼくにとっては、「かいじい」は、「懐爺」なのです。

だからここでは、「懐爺」とよぶことにします。

なお、いちおうことわっておきますと、この怪談話というのは、 танなるお話の次元（じげん）ではなく、あのころのぼくが、じっさいみたり、きいたり、かんじたりした、お化けの話であります。

もちろん、お化けのことに関しては、「懐爺」は、ぼくの数十倍数百倍もの、体験があるはずなのですが。